



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

21

小泉とし夫

■〈怨〉がサボタージュ

わたしたちにはどれが民
需用製品なのか、皆自分か
るはずはなかったが、だま
された正月帰郷の陰謀に対
する怨(うら)みは、河野
課長の弁明を拒否し、なお
も不正な製造責任を追及し
ていると、突然、血相を変
えた教頭先生が食堂にどな
り込んできて「みんな、す
ぐ職場に戻りなさい。さも

「おろぎ」の部屋

部屋には「おろぎがいるのに
なぜ「おろぎ」の話をしていないのか
この部屋の人達はみんな女の話ばかりする
女は男の話ばかりする
そつしてそのため
みんなが猜疑し合っている

部屋には「おろぎがいるのだ
秋になるとどの部屋にも
きまって「おろぎ」がでてくるのだ
「おろぎ」は世界のすべての恐怖や
死や病いや離別やその霧の彼方とかいふものと
同じ深い方向からくるのだ
それを「おろぎ」というのだ

だのにこの部屋の人達は
みんな酒に酔つ話はかりする
女は男が酒に酔つ話はかりする
そつしてみんながそのため
軽蔑し合ってはかりする

「おろぎ」を話さなければいいのだ
「おろぎ」がなぜ現われてきたのか
「おろぎ」が現われなければならぬ不思議が
世界の何処かにあったのか
「おろぎ」のかたちを
「おろぎ」の鳴く音を
「おろぎ」の遠い日の恐怖のことなどを
この部屋で
話さなければいいのだ

ないと全員退学処分をとり
ます」と声を荒らげ威嚇
(いかく)したのです。わ
たしたちは無言のまま、曠
恚(しんい)をこめた白い
眼を教頭に向け、いつまで
も立ち続けていました。

その後、職場代表が鶴見
の総持寺境内に時間内集会
をして協議し、仕事をする
ふりだけというサボタージュ
戦術に転換することにな
りました。会社とM先生に

対する埋めがたい空白がで
きてしまい、岩中学徒の生
産実績はどんどん下降して
いきました。

変化は職場規律の破たん
にもみられ、それまでは統
導教師が職場を巡回してく
ると、作業を止めて全員が
起立し班長が「〇〇班総員
何名異常ありません」と報
告していたが、もはや巡回
があつても知らん顔で作業
をつづけ、教師を無視する
よつになった。

以前のように熱中しない
緩慢な作業行動をとるわた
したちを、職場の工員たち
は理解してかばい、温かく
支えてくれました。

変化は寮生活にも波及し
た。担任のI先生が監督と
して来寮したある夜、消灯
の点呼がおわって寝静まっ
たころ、どこの部屋からと
もなく木魚をたたく声音が
して「ナンマイダ、ナンマ
イダ」と誦経が唱えられる
と、つづいて「シュンスイ、
ナンダ、坊主」「シュンス
イ、ナンダ、坊主」という
コールが各部屋からさざ波
のように連呼されていっ
た。

シュンスイとはI先生の
名前で、坊さんの出身だっ
たのです。「」のように、裏
切られた正月帰郷の怨み
は教頭だけにとどまらず、
気弱な担任まで巻きぞいに
してしまつた。

だまされた〈正月帰郷〉
によるストライキ事件は、
決して一人の扇動によるも
のではなく、〈怨〉の連帯
から発生したものであった。

(毎週木曜日掲載)

(詩集「動物哀歌」より)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

■短詩「雑音」の背景
 「正月帰郷」とはぼちちりを受けた者がもう一人いた。S君という、教頭派とみられた成績の良い生徒だった。

そのころ、職場や寮で起こった不都合なことがすべて教頭に筒抜けで、それを教頭がとりあげて職員会議の問題にしていると、病気で帰盛した同僚から便りしてきたのです。

有志の間でひそかに協議され、だれが教頭のスパイなのか詮索のアンテナを張り、それに引っかけたのがS君だった。処分を有志

によって衆議され、鉄拳制裁と決まった。この衆議に参加しなかった者も半数以上あって、昭夫はその一人だった。

制裁は紫雲寮の中庭で行われることになりました。ある夜のこと、S君を中庭に呼び出し、二十人近い有志の者たちが彼を取り囲み人民裁判みたいな大衆討議を行いました。制裁はS君と有志代表のT君による決闘と決まった。

その夜は、野分が中庭を吹きぬけていく荒涼とした暗夜だった。有志たちは、まるで敵討ちの矢来（やら

兎

月には兎がいるのだと
 私は小さい時思っていた

恐ろしく月ほでこほこの冷たい山が広がるばかりで
 平地には崩れた塵埃が
 幾重にも重なっているだけだろう

海といつものは名ばかりで
 一滴の水もない暗さが
 深く沈んでいるだけだろう

だが今でも私は
 月には兎がいるのだと思っている
 月は昔疲れた飢えた旅人のために
 身を焼きささげた兎だったと
 この涯というもののない宇宙のなかには
 死んだものはひとつもないのだと
 おそらく数知れない天体のなかには
 数知れない兎がすんでいて
 数知れない疲れた旅人もいるのだと
 今でも子供のように思っている

(詩集「動物哀歌」より)

い)のような円陣をつくって囲み、二人の壮絶な決闘を固唾(かたず)をのんで見守った。やがてS君は鼻血を流し土下座してあやまり、二人が握手を交わして終わった。

ところが、かねて教頭派と目されていたある生徒がその深夜、危険を感じて寮を逃じし、親類に身を寄せたといううわさだったが二度と帰寮しなかった。

こうしてスパイ事件も暗黙裡に收拾され、寮は平穩にもどった。昭夫は、同室の者から決闘の始末を聞かされたのかもしれない。詩稿ノートに「雑音」という短い詩は、その決闘への批評と思われるのです。

雑音

あまりケンカしないようにやってくれ
 男らしくもない お互い
 にさ
 馬鹿 馬鹿しいったら
 ありはしない
 もっと たんたんとしたらどうだい
 女々しいね みぐさいね
 僕 そんな事は 一番嫌いだ
 やっぱり そねんだりする
 ることは
 女のする事だ
 僕 そんな事は 一番嫌
 いだ
 けんかするんでも一度に
 やって
 さっさと 引分けてしま
 へよ

(毎週木曜日掲載)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

②

小泉とし夫

■海防艦の進水式

秋も深まってリンゴを懐かしがるころ、わたしたちは相変わらず紫雲寮から工場通いをしていました。電車通勤をやめさせられてから工場まで徒歩で一時間余りもかかった。その道すがら、工場街あたりで大柄な白人捕虜の隊列とすれ違ふことがあった。警棒をもって引率する日本人が、やけに小さく見えた。オーストラリアの捕虜だったらしい。

わたしたちの職場である日本鑄造鶴見工場のお隣

蛇

蛇は頭をさかれて死んだ
まるで生きている
蛇そのもののように

蛇は重い影のように川を流れた
もしかしたなら

蛇を流れてゆく川だったか
流離した川の瀬音だったか

世という世にはなぜ
嫌われるものと嫌うものがあるのだから

蛇の記憶は
流れ星となって虚空に消えた

それからの一面の野の亀裂
一面の荒野の果に

白い花は咲いたという

(詩集「動物哀歌」より)

ました。進水するのは海防艦ということだった。わたしたちは海防艦のスクリーン止めの鑄型づくりをしていたから、わたしたちも関係者の一員だからと、変なリクツをつけて出かけたのです。

型のごとく神主の神事も終わると、洗礼のシャンペンが艦首に炸裂(さく)れつし、おもむろに艦体が造船台から滑り降りて、海水にザワツと進水した瞬間、意外にも捕虜たちが一斉に帽子を振って歓呼しました。彼らの母国の敵艦になるはずなのに、心から歓送する光景をみて、涙腺(せんに)に沁(し)みるものがありました。これは教科書を放棄し労働に明け喜れる少年に与えた、まことに得がたい戦時下の授業でした。

しかし、戦局は確実に破局に向かっていました。

九月に、グアムの日本軍が全滅して以来、マリアナ諸島は日本本土を狙うB29の基地となりました。そして十一月二十四日、ついにB29八十機による東京初空襲となったのです。ついで二十七日にはB29四十機が関東、東海道そして近畿南部に白昼分散し爆撃するようになっていったのです。

(毎週木曜日掲載)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

24

小泉とし夫

■職場の防空壕

十一月末ごろから、B29は定期的に来襲するようになったので、工場の職場ごと

に防空壕が構築された。歳末を迎え、成田山の初詣をするとかで大晦日の夕方から出かけた者もあったが、休みなので皆ゆっくり起床してから本社の食堂に行き、わずかばかりのおもちで中学最後の正月を祝った。

それから鎌倉や浅草に行くグループもあったが、多く

マンモスの背

禁欲した姿勢のままに
マンモスは夜を眠ったという

禁欲した姿勢のままに
マンモスは未来を信じたという

眠りの姿のマンモスが
其処にあった一切の形象を否定して
豪然と崩れ落ちるのは
何時の日だろう

未来を信じたマンモスが
遠い海鳴りのように
歩み始めるのは
禁欲した姿勢のままに
今五十億年を眠るといふ
その背こそかなしきいきもの
その背こそわびしきいのちたちの
唯一の実存の
歩行の場なのだ

(詩集「動物哀歌」より)

くの者は寮でごろごろして、例の「正月帰郷」の苦い記憶を思い出していた。二月になるとB29ばかりでなく、グラマン戦闘機を伴って襲撃するようになった。グラマンは本土近くの洋上に待機するアメリカ機動部隊の艦載機で、低空から機銃掃射するので危険だった。

一日に何度も退避することもあり、作業が中断するの

で工員たちの生産意欲も低下していった。壕は社交の場

で、工員たちのおしゃべりは魅力的だった。皇居を

防衛する高射砲は性能が抜群なこと、動員学徒らが内閣を倒そうと不穏な動きがあるとか、刺激の強い話題に聞きほれ、警報が解除されても壕を出ようとしな

いので組長からどやされたりした。

頻繁な空襲に慣れっこになると、窮屈な防空壕を嫌

って壕の入り口の窪みにしやがみ、上空でB29とそれを迎撃した日本の戦闘機がキラキラと空中戦をするのを観戦する横着者もいた。

ところが爆音とともに煙突の間からグラマンが低空で迫ってきたのです。

しかも飛行士の顔が見えるほどの距離から、バリバリと機銃を浴びせてきたから、彼は必死に防空壕に駆け落ち、九死に一生を得たという。

そのあとで現場に見に行ったら、工場のコンクリー

ト塀に生々しい弾痕が残っていたのです。

それは百七十機におよぶ

B29と艦載機が、東京から

京浜地区にかけて波状攻撃をした二月十七日のこと

でした。(毎週木曜日掲載)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

25

小泉とし夫

■水溜りの防空壕

B29の焼き打ちが寝込みを襲うことが多かった。軍管区がラジオでB29の侵入を伝え「横浜・川崎方面は嚴重なる警戒を要す」と警戒警報を発令すると間もなく、空襲を知らせるサイレンが紫雲寮の窓に響いてくるのです。「オイ空襲だッ起きろッ」と声がかかり、すばやく枕元に置いてある服に着替え、中庭の防空壕に退避する。こうしたこと

するようになった。寮の立地は埋め立てられた水田跡の造成地で、防空壕の中は滲(し)み出た水が溜まっていたから、わたしたちは壕を避けしゃがんでいた。夜空に交差する探照灯がとらえたB29、それを狙う高射砲の弾道の曳(えい)光と炸裂(さくれつ)する点々、まるで無声映画のようで、わたしたちは危険を忘れ眺めていた。

対岸の大火だったが、その夜の紫雲寮の窓は夕焼けのように真っ赤だった。このまま日本の国が焼き滅ぼされてしまうのではないか、わたしたちは不安に包まれながら、くすんでゆらぐ劫火(ごうか)の影におびえました。

昭夫もその夜の印象を、ずっと戦後まで引きずっていたのかもしれない。『動物哀歌』の詩「破船」にその片鱗(ひら)がよみとれる。詩稿ノート「荒野とポプラ」にある「破船」は、その下書きの詩で、荒っぽい措辞(ひゆ)し戦災の風化にく

野の兎

野の兎を追い出すな
 そのような新しい銃をかまえても
 兎ならば石ゆみでも追えるのだ

兎の赤い目を消すな
 そのように尖鋭な弾を込めなくても
 兎の赤い目ならば
 石つぶてでも消せるのだ

野を渡る兎の跳やくは
 世界とともに流れるものなのだ
 野を見つめる兎の赤い目は
 世界と共に終るものなのだ

だから兎を撃つてはいけぬ
 兎を野から追い出したところで
 あとはなにも残らないのだ
 兎を血みどろにして殺して見たら
 そのあとには
 なにもありはしないのだ

いくさがあった
 氷が割れた日から
 血が太陽のように吹き出した
 その日から
 いくさは絶えまもなく
 あった

それから破船は
 風化し
 そして風化し続け
 (中略)

うばわれるもの
 一切をつしなった破船は
 海を…空という空を
 そして風化も…しきれないままに
 仕様のない
 船の形のままに
 (以下略)

(詩集「動物哀歌」から)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

■進学組と残留組

空襲の定期便にも慣れて寮生活は、卒業が近づいたので進学や就職の話題でさわついていた。昭夫も岩手青年師範学校を一時は志望したが、大家族の家計を考えると言い出せなかった。盛岡中学に通う二人の優秀な弟のため進学をあきらめ、どこか就職したいと考えていた。

岩手医専（現岩手医科大学）の受験で帰郷するN君は朝早く「川崎を発ち京浜電車で上野に向う途中、秋葉原あたりから見た下町は、一面焼野原で、そこそこ蔵のみボツと残されていた」と回想しています。三月十日の大空襲の数日あとのことでした。

進学組と求職組の大半が帰郷して行き、残留組だけ

となった寮は、妙な静けさに澱（よど）んでいた。残留仲間のカラ元気な笑いのしらじらしさに、昭夫は留年した三年生当時の孤独感を寂しく思い出していた。

それは、のちに「ある笑いについて」（『動物哀歌』）にイメージされた風景でした。この作品は、詩稿ノートにある初期形「笑いについて」とほぼ同文であり、詩誌「首輪」四号に発表するなど、よほど愛惜する詩であったとみられます。

狼

狼は火炎の国の動物だ

ほくほくは今長年の業病のなから

狼の世界のことはかりを考えている

ウォーンとかわき切った声がびたりと止めるとい

う

それ以上に不思議な

炎の国への通信のことを

ほくほくの北の辺鄙な故郷では

犬が深夜の天に向って遠吠えを始める

火柱が立つという伝説があるが

その火ではない別の火のことを

それは卑猥な歌や踊りで騒がしくない所

スターなどという人のいない所

あやまって其処に立ち入ったなら

二度と出てくることのできない

異次元世界の火炎のことを考える

其処に吠える揚言どめの声

其処に存在する毛の磨り切れるまで磨り切れた生

きた物体

物体の死守する終末の地

それが存在する限り

朽ちたり燃え落ちたりすることのない四方の眺望

狼の住む場所こそ

其処なのだと思える

その笑いは

底に笑つべきなんにもな

かったのだから

憂愁の枯れた野の上を

カラカラと渡って行った

その笑いは ただたくさ

んの

ニヒルの集りに過ぎな

ったのだから

限りのない洞のなかの響

きのように

空のはてへ消えて行った

天上の神々は快よい光の

なかで

もう眠りについいたらしい

地上の人達の首のない笑

いだけが

うつろに

いよいよ強くなって行っ

た

「天上の神々」とは、た

ぶん帰郷していった級友た

ちに投げかけた視線だと思

います。

（毎週木曜日掲載）

（詩集「動物哀歌」より）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

27

小泉とし夫

■満洲国官吏に勧誘

三月上旬のころだったらしい。旧満洲国大使館の人事官という人が、満洲国官吏の勧誘に紫雲齋を訪れました。たまたまM教頭先生が統導のときで、人事官の依頼を受け入れた教頭は、就職未決の残留組を集め、お国のためだからと応募を強く勧めたのです。

人事官の話は、いいことづくめだった。満洲には日本本土のように空襲もなく、食料は潤沢で、五族協和の素晴らしい王道楽土だということです。

小鳥を葬るつた

死んだ小鳥は
葬らなければならぬ

ほんとうの空ならぬ
何時だって真青な色なんだ
そつ思いながら
みきちゃんもかちちゃんもけんちゃん達も
みんな鉄砲なんかうたない
幸せな大人になるんだもの
そつ思いながら

死んだ小鳥は
葬らなければならぬ

(詩集「動物哀歌」より)

しかし実際には、戦局の悪化とともに軍需工場から非日本人労働者が逃亡し、役所においても同様で官吏の欠員補充に追われていたのだった。それで内地の中卒予定者を目当てに動員先の宿舎を勧誘し回っていたのです。

人事官のうまいセールスに五人が応募することになった。そのなかの一人が昭夫でした。

進学を諦めた昭夫はいずれは就職することになるし、なまじつかな職場より満洲の官吏になるほうが生

きがいがありそうに思えた。

軍国少年として育った昭夫にとって、五族協和とか王道楽土の理念にどこことなく惹(ひ)かれ、満洲という新天地に誘惑されたものだった。

満洲の官吏の事態はよほど逼迫(ひっぱく)していたのか、面接して即時採用と決まり、渡満の準備をするために帰盛することになった。

「満洲行きが決まったのでキップを渡され、急ぎよ帰盛したのは三月十日の東京大空襲の翌日だった。焼け跡を歩いて上野駅まで行ったことを鮮明に記憶している」と、のちに山内君が述懐しているが、三月十日の大空襲というのは、B29百三十機(米側資料・三百三十四機)が未明から下町を中心に東京全域を襲い、死者八万三千人以上、二十五万九千戸以上を焼きつきました。

そんな大被爆の翌日だったから、上野駅が機能したということは驚くほかほかしい。

(毎週木曜日掲載)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

28

夫とし泉小

■満洲への旅立ち

一夜にして一望千里となつた焼野原をば、山手線の窓から昭夫たちは食い入るように見ながら上野駅に着くとホームは避難する乗客があふれ、超満席の車内に身動きできぬままの十八時間、やつこのことで昭夫たちは盛岡に帰ってきました。すると盛岡も三月十日に空襲があり、駅前から大沢川原辺りまで黒い野原と

なっていました。

加賀野の家に帰宅した昭夫がやることは、まず満洲行きのことをきりだし、父親に理解してもらおうということだった。ところが、大使館よりすでに渡満のビザやら交通費が自宅に届けられていたので、両親は昭夫の意思を確かめるつもりだったのです。同行五人のうち一君の場合は、父親が息子の満洲行きを容認しな

つたので大使館に辞退を通知し、ビザおよび交通費を返却していたのでした。

ところが昭夫の満洲行きには、両親は暗黙の了解を置いて、官吏として渡満することを快諾してくれました。父三好は盛岡地裁の書記を勤めており、満洲国の大変な国内事情を知らないわけではなかったが、子どもさんの家庭の事情から、昭夫の決意には内心ほつとしていたとみられる。

熱帯鳥

熱帯鳥が飛んでいるのだと思つようになつた

熱帯鳥は永劫の海の上を飛んでいるのだと思つようになつた

それは黒い巨大なうねりの海をそれは規律を乱した粒子のように荒れる海をそれは腹をすかした貪欲な魚のなかの海を

熱帯鳥は黒い海の上を飛んでいる白い鳥だと思つようになつた

熱帯鳥は永劫の夜のなかを飛んでいる寂寥の鳥だと思つようになつた

ある時は熱せられふくれあがった雲のなかをある時は恐ろしく冷えきった弦月の光りの底を

熱帯鳥が近づいているのだと思つようになつた

ひるの喧噪な生活の疲れのひととき盗みあう夜のひそかないとなみの後悔のめまいのあとに

熱帯鳥は

非常な速度で近づいているのだ

(詩集「動物哀歌」より)

「兄のすぐ下の弟(和夫)の話だと、家督は兄(昭夫)が継ぐのだが自分が継がず弟に譲つたらしいフシがあるというのです。昭夫兄はおとなしいし、成績もあまりパツとしない。次男の和夫のほうが活発で成績も良い。親たちは口にはしなかったが比較していたと思います。昭夫兄は感受性の強い人だったから、親の気持ちを考え家督を放棄して満洲へ行ったのかもしれない」と弟達夫さんが述べ懐いている。

敗戦後、満洲にいる昭夫の消息が不明だったころ、たまたま自宅に友人を呼んで酒を飲んでいた父が、にわかにな「昭夫に申し訳ないことをした」と泣き出したといふ。

昭夫の満洲への旅立ちに、父は歓迎しながら忸怩(じくじ)たる思いだったといふ物語を逸話です。

(毎週木曜日掲載)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

29

小泉とし夫

■下関への車中で

盛岡駅から六人掛けの座席に村上昭夫、山内健一郎、古館敏夫、浜田彪がおさまり、心配そうに見送る家族たちに車窓から笑って手を振ってみせた。三月二十日過ぎごろのことだったらしい。

そして下関行の列車に乗車したのは、たぶん東京駅二十時二十五分発の夜行だ

鳶の舞う空の下で

鳶が舞つと空が荒れてくると
野良着を着た土地の老人が言つたのだ

僕の部落はとても寒くて低い原野のなかにあるのだから

それで無数の鳶が舞うのだ
僕の魂は低い原野の部落のように
ここに生きてさびしいから
鳶の舞うのがよく見えるのだ

僕がまだ幼い子供だった時
鳶の舞う別々の空の下で
北の国へ行く兵士を見送ったことがあった
今ではそれよりももっと寒冷な戦場へ行く兵士を
やはり鳶の舞う空の下で送るのだ
やはりあの時と同じように
行ったきり帰ってこない
ほくの兵士を

鳶が舞つと空が荒れてくる
それは幾年たっても変わらぬ
ほくの毎日送り続けるかなしい兵士が
永遠に帰ってこない以上

(詩集「動物哀歌」より)

ばいでした。すると、通路の乗客の間から突然騒ぎが起ったのです。なんでも足を踏まれたのが原因だったらしい。踏んだ相手が朝鮮人と分かる、踏まれた男は声を荒らげてなじり、むりやり朝鮮の人を車外に突き出してしまったのです。その人は、動きだす汽車に向かつて「天皇陛下は(わたしたちにも)ひとつ

なに」と悲痛な哀訴を叫んでいました。もつ一つの事件は下関駅にだいぶ近づいたあたりのことでした。「それでも、お前らは日本人なのか。天皇陛下の赤子なのか」という怒声が車内を突き抜きました。怒鳴られていたのは朝鮮の人だったが、怒鳴っている相手も朝鮮の人であることを知り、より深く人種差別の実態に触れた思いがしたのです。

下関駅には十七時に着き、大使館から指定された駅前の伊藤旅館へと向かいました。ここに新規に採用された中卒渡満組が集結し、下関港から釜山へ乗船する予定日まで待機するのです。二年前までは神戸・大連航路もあったが、米潜水艦の危険を避けて距離の短い関・釜航路による渡満となったのです。

(毎週木曜日掲載)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

30

小泉とし夫

■景福丸で釜山へ

下関の伊藤旅館に投宿した夜、B29九十九機による空襲騒ぎがあった。山内君はこの夜のことを「その晩に空襲があつて防空壕に避難した。港湾がやられたので博多に移動した」と述懐しています。

この夜の空襲は『日本の空襲・7』（三省堂刊）の資料によれば三月二十七日のこととみられる。B29が関門海峡の海上封鎖のため一〇〇〇個の機雷などを下関地区に初めて投下した空

襲だった。

下関港が使えなくなつたので、渡満組は急ぎよ博多に移動することになった。

博多港には昭和十八年より関釜航路の補助として博多と釜山間に新航路（博釜航路）が開設されました。

この博釜航路も米軍投下の機雷に触れ興安丸、壹岐丸など相次いで沈没する「死の海」と化していったので、六月以降は関釜航路とともに休止となり、釜山航路基地が先崎に移されることになりました。昭夫たちの航海

も、そんな危険が道連れでした。

博多から乗船したのは、たぶん景福丸だった。三六一九ト、旅客定員九百四十五名という昼夜兼航行便の高速渡峡船で、黒く塗った船体とまっ白い客室のライン、そして樺色（かばいろ）の二本の煙突に赤く「工」の文字が描かれ、とても優雅な客船でした。

客室はオーニング甲板の前部を一等区画、後部を二等区画とし、三等区画は一段下のメイン甲板後半部に設けられていた。昭夫たちは、じゅうたん敷き座席もあり、縦長の大部屋に二段寝台がならぶ二等区画の船客とみられ、翌朝釜山埠頭から八時発新京行急行に乗車するため、博多港を深夜に出港したものと思われま

す。
昭夫は上段のベッドにもぐりこみ、玄海灘のうねりに身を任せながら、あすから始まる満洲の生活に思いをはせていました。

（毎週木曜日掲載）

カフスの火

カフスの火が燃える

ブルルブルルと

空が冷めたく暮れる時には

殊更に冷めたく燃える

そのために空が極まりないかのように

ブルルブルルと

そのために白い雲が

一層輝いてくるかのように

ブルルブルルと

空がまっかか輝やく時には

殊更にまっかかに燃える

（詩集「動物哀歌」より）